第51回 福岡県地方史研究協議大会

伊東尾四郎と福岡県地方史

主　催　　福岡県教育委員会

共　催　　福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）

期　日　　平成２９年６月２４日（土）

会　場　　福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下１階）

日　程

１３：００　開　　会

◆主催者あいさつ

◆福史連会長あいさつ

１３：１０　講　演①（７０分）

伊東先生の処女作は『京都郡誌』

講　師　山内 公二 氏

１４：２０　休　憩　（２０分）地方史フェア

１４：４０　講　演②（７０分）

伊東尾四郎の生涯と自治体史編纂

講　師　草野 真樹 氏

１５：５０　質疑・応答

１６：００　閉　　会

講師プロフィール

◎山内　公二（やまのうち　こうじ）氏

現　　職	美夜古郷土史学校事務局長
専　　門	近･現代史
研究テーマ	京築地域史
主な著作	『京築風土記』美夜古郷土史学校（1977）
	『写真集　明治大正昭和　行橋』
	共編　国書刊行会(1981)
	『京築の文学碑』共著　美夜古郷土史学校（1984）
	『新京築風土記』幸文堂出版（2017）

◎草野　真樹（くさの　まさき）氏

現　　職	九州産業大学　商学部講師
専　　門	経済史･経営史
研究テーマ	明治･大正期における企業勃興の分析
論　　文	「伊東尾四郎の履歴と研究
	―その歩みと福岡県史の編纂過程を中心に―」
	『福岡地方史研究』第 50 号(2012)
	「地方の企業勃興とその担い手
	―福岡県を事例として―」
	『経営史学』第 47 巻 1 号(2012)

伊東先生の処女作は『京都郡誌』

美夜古郷土史学校　　山内　公二

『福岡県史資料』（全１０巻）をはじめ、多くの市史、郡史を編纂された伊東尾四郎先生の処女作は、『京都郡誌』だった。大学卒業後、維新史料編纂所に就職されたが、病気のために帰省され、豊津中学校教師となられたのが、『京都郡誌』を編纂されるきっかけとなった。

三度出版された『京都郡誌』

先生の処女作である『京都郡誌』（Ａ５版１２７８ページ）は、大正８年（１９１９）に京都郡役所が刊行したが、発行部数が少なかったため、戦後、この書を眼にすることがむつかしく「幻の郡誌」といわれるほどだった。

昭和２９年（１９５４）、行橋町のローカル祇・民朝新聞社長の長田喬氏は「伊東郡誌を再び」との熱い思いで、Ｂ５版３６０ページに組み替えて再刊させた。

さらに、昭和５０年（１９７５）、再び品薄になり、郷土史研究に事欠く事態になったので、美夜古文化懇話会（友石孝之会長）が、長田制作の再刊郡誌を復刻した。

福岡県下の郡史や市史の復刻出版は、ほとんど東京の出版社が手掛けているが、二度も地元で再刊した郡史は京都郡誌だけではなかろうか。

この２回の再刊の結果、貴重な事実が判明したことが３点あった。

その一つは、初回再刊の郡誌（長田版）の巻末に「伊東家累代学事略歴」**＜資料①＞**と「伊東尾四郎略歴」**＜資料②＞**が加えられたことだ。（この２点は、伊東家から長田氏に提供されたものと推測される）

二つ目は、２回目復刻の郡誌（美夜古版）の序文に、友石孝之会長が、ご子息の伊東祐俊氏から提供された資料に基づいて、伊東先生の功績を紹介したこと。**＜資料③＞**三つ目は、２回目の復刻郡誌のしおり（付録）に、伊東祐俊氏が「父の思い出」と題した一文（１６００字）を寄せられたことだ**＜資料④＞**

伊東祐俊氏は、福岡市中央区薬院１丁目で、伊東医院を開いておられたが、友石会長とは九州大学医学部の同期生だったという、奇遇である。

豊津中学校時代の伊東先生

もし、伊東先生がお若い時、お元気だったら、東京で全国版のお仕事をされていたであろうが、脚気に悩まされたからこそ、帰省され、福岡県のためになる多くの業績を残されたとは、驚きである。

明治３０年（１８９７）４月、伊東先生が赴任された豊津中学（京都郡みやこ町）

は、明治３年（１８７０）、小笠原藩が開いた藩校・育徳館に始まるが、その源流は宝暦８年（１７５８）に小倉城内に開設された藩校・思永館にさかのぼる伝統校だ。

当時、福岡県内の中等学校は、修猷館、明善、伝習館と豊津の４校（いずれも旧藩校）だけで、豊津中学は旧豊前国では、唯一の中学だったので、生徒は旧企救郡や田川郡、築上郡など広範囲から入学しており、寄宿舎に入った者も多かった。

校史によると、「明治３０年の職員と生徒数は、校長１名、正教員１２名、准教員５名、舎監４名、書記４名。新入生２２１名、生徒数６０６名」とある。

明治３２年と翌３３年の『福岡県一円富豪家一覧表』の京都郡豊津村の項を見れば、伊東尾四郎として明治３２年は９９級（年間所得８４０円）で、村では１１位にランクされている。また、明治３３年の一覧表では、豊津村の６位に豊津中学校長の入江淡が９２級（年間所得１３００円）、８位が医師の赤田壽三郎で９３級（１２００円）、９位が同校教頭の大森藤蔵で９５級（１０００円）、１０位が伊東尾四郎で１０５級（９００円）である。

この年、先生は赴任４年目で３１歳だから高給取りだったといえよう。

また、赴任８年目の明治３７年（３５歳）で教頭となり、明治４１年（３９歳）で新設の小倉中学校長に栄転されたのは「帝国大学卒の学士様」だったからであろうか。

伊東先生が在職中の豊津中学校卒業生名簿を見ると、明治３１年の１１回生から明治４１年の２１回生までの１１期で、合計６６４名の卒業生がいる。

この中には、陸軍大臣の杉山元、逓信大臣の勝正憲（１１回）、住友銀行頭取の岡橋林（１４回）、漱石門下で「三四郎」のモデルといわれる国文学者の小宮豊隆、中山製鋼所をおこした中山悦治（１５回）、七十七銀行頭取の柏木純一（１６回）、日本ＹＭＣＡ総主事の斎藤惣一（１８回）をはじめ、大正、昭和に活躍した人物も多い。

伊東先生は、創立５０周年記念で、昭和１２年に発行された『豊津中学校史』に、「思永館より豊津中学校へ」という一文を投稿されている。冒頭部分のみ紹介しよう。

「私は、明治３０年春に豊津に赴任し、同４１年春に小倉に転任したから、３１年卒業の補習科の諸君から、４５年卒業の諸君までは一度は親しく相接した筈である。追々老境に入って、諸君の成人ぶりに接すると、真に昔懐かしい感に堪えない。もし思い出話をするならば相当話題も多いが、聞けば五十年史を編纂されるとの事、同じ貴重な紙面を汚すならば、学校の沿革に関係の事を述べた方が有意義であろうかと考えて、比文を起想する。（略）思永館から豊津中学校への沿革史は、既に二度も校友会雑誌に載せられているが、その後、私が調べた一端を述べてご参考に供したい。思永館創立頃の事は小笠原年譜の中に記事がある」。いかにも歴史研究家・伊東尾四郎先生らしい文章である。

小倉中学校長時代

先生は明治４１年（１９０８）３月３１日（３９歳)、新設の小倉中学校長に就任された。

明治の新しい学校制度ができた当初は、県下の中学は４校だけだったが、その後、明治３５年に東筑と嘉穂の２校が設立され、さらに明治４１年に小倉、朝倉、八女の３校が新設され、県下の中学は合計９校となった。

「小倉高校八十年史」には、学校創設当時の伊東先生の動向が記されている。

先生は、日誌を詳しく書かれており、「開校１年の歩み」が校史の４ページにわたって掲載されている。

❍仮校舎でスタート　❍入学試験の実施　❍教師の人事　❍東京出張（図書購入も）

入学試験６２２人が受験、合格者１５３人。大正２年３月、卒業できたのは６０人。

校風・教育方針に「勤勉、正直、規律」を掲げる。

終始一貫、修飾・技功のない素朴そのものの性格をもって信念に生きられ、勤勉第一主義をモットーとした。

入学式、始業式の訓辞は５分以内。「諸君は日々、課業に精を出し、煉瓦石の一個一個を踏んで高大な建築を成すがごとく、着々と堅実に築き上げていかなければならない。礎石を確実に」と、口癖のように生徒たちに語りかけたという。

職員の「和」を大切にした。

① 校長より年上の職員は入れない。
② 現職員の上席となるような人は、好ましくない。
③ 英語、数学、国語の教師は１年から５年まで持ち上がりのできる学力のある人をとりたい。

良い先生は、半年でも１年でもかけて説き伏せて連れてきた。

❍議論は好まない人。いったん決まったら変えない。職員会議で議論百出しても、いったん議決されたら、先頭に立って実行した。統率力があった。

❍予告なしに試験をした。１０分、２０分の試験をしばしば行った。生徒は油断できない。予習、復習をしなければならなかった。

❍担任が休んだ時、校長も東洋史を教えた。重要なことは、何回も反復させ、試験にも出した。いやでも覚えさせた。

❍前の時間に教えたことを５分間ぐらい質問してから授業に入った。

小倉中学校長在任中、『門司新報』に「北豊人物志談」を連載。ペンネーム玄海生。明治４４年（１９１１)、４２歳の時、『京都郡誌』編纂を委嘱される。

県立図書館長に就任

大正５年（１９１６）１月２５日、小倉中学校長を退職（４７歳）。１月２９日、福岡県立図書館事務取扱を命ぜらる。同年９月２５日、図書館長に就任。

大正８年（１９１９）、５０歳の時、『京都郡誌』刊行。**＜資料⑤＞**

大正１０年（１９２１）、『小倉市誌』上・下刊行。

大正１２年（１９２３）、福岡県立女子専門学校教授兼任。

昭和５年（１９３０）、６１歳。福岡県立図書館長定年退職。専門学校教授に専任。
福岡県史料調査事務嘱託を命ぜらる。

昭和６年（１９３１）、『企救郡誌』上・下刊行。
『宗像郡誌』上・中・下刊行。

昭和７年（１９３２）、『福岡県史資料』全１０巻刊行。
『久留米市誌』上・中・下刊行。（編纂顧問）

昭和８年（１９３８）、『門司市誌』刊行。

昭和１１年（１９３６）、『八幡市誌』刊行。

昭和１４年（１９３９）、『戸畑市誌』刊行。

昭和１５年（１９４０）、『小倉市誌』続編刊行。

昭和１６年（１９４１）、『福岡県史資料　続』第１輯刊行。

昭和１８年（１９４３）、『福岡県史資料　続』第４輯刊行。

昭和１９年（１９４４）、『大牟田市史』刊行。

昭和２３年（１９４８）、『福岡県史資料　別輯　福岡県史料叢書』全１０輯刊行。

昭和２４年（１９４９）８月２４日、逝去。満７９歳。戒名＝養心院温故研精居士。

伊東家累代学事略歴

初代　理兵衛祐善

元祿の頃　儒学を以つて福岡の支藩直方侯に仕える。

宮本茂任の信天翁伊東君碑に

旧藩主　黒田氏儒家　伊東氏　其祖諱祐善　為貝原門高弟　始仕於支封直方　及功崇公入嗣本宗　従移福岡　世業儒学

森政太郎の筑前名家人物志に

猶扇　伊東祐善　元祿の比　儒学を以つて　黒田伊勢守長清に寵用せられ頗　文材に富めり。

伊東祐保が撰める祐善肖像の贊に

宴尊孔孟　志気豪雄　常飲美酒　其楽融々　寵遇君公　頗尽孤忠　恭敬貫賤　徳容最隆

貝原益軒が　竹田定直に送れる書翰に

伊東猶扇子左太郎と申者拙者門下に入学仕度由申候に付　先日より招置候家人と同じく　相働申候父は猶扇と申候　伊勢守様より　少々御扶助被成候。

直方藩の元祿分限帳に十石四人扶持馬医　伊東理兵衛とありざれば　馬医をも務めしものか。

寛延元年十一月二十三日歿す。年九十三才。

二代　勘太夫祐保

福岡藩士履歴（光雲神社禅庄保存）に

御功米七石三人扶持　伊東兵太夫　享保十年三月直方より福岡へ引越　城代組　同二十年六月十四日御祐筆見習記録方

元文六年三月十一日　上より御免学問家芸　城代組宝暦十三年七月朔日　御館儒書講釈　明和九年三月二十五日歿す。

年八十二才。

三代　忠作時教

福岡藩諸士履歴に

御功米九石三人扶持　伊東忠作　明和七年六月五日　家督　城代組　学問家業。文化十二年八月十九日歿す。年六十才。

四代　太郎次祐護

福岡藩諸士履歴に

御功米九石三人扶持　伊東太郎次　文化十三年九月十八日　遺跡　城代組　儒者家業。天保七年七月五日　学問所指南加勢見習当時出方、文久元年十一月十七日歿す。年六十一才。

五代　謙吉祐思

福岡藩諸士履歴に

御功米九石三人扶持　伊東謙吉　弘化四年十一月四日　家督　城代組　儒者家業。嘉永元年十月二十八日　学問所指南加勢見習　仝四年十月六日学問所指南加勢助　仝年十一月二十二日　学問所預諸用兼並武芸稽古所預共加役定助　仝年閏二月九日　学問所指南加勢　文久元年正月十二日　学問所指南本役助　明治四年四月九日　藩学校授読　仝日嘉麻郡大隈学校文学引立受持。

廢藩置県後の略歴

明治六年四月　第四大区仮小学事務取調懸　十二月小学教則方　四等上卒業仮免許を受く　八年六月第四大区小学四等教育拝命。十三年中学六等教授拝命　宗像分校在勤　十七年九月　多年教育の勤労を賞し　文部省より三等賞拝受。十八年九月公立嘉穂学校教員拝命　二十年二月県立農学校三等助教諭　二十一年より二十五年まで　小学校雇教員　二十九年八月歿す　年七十二才。

六代　伊東尾四郎

別紙略歴表参照

伊東尾四郎略歴

明治二年十一月三日生

出生地並に原籍地
福岡県筑前国宗像郡東郷村大字東郷四九二番地

明治十九年三月二十五日　福岡中学校初等科卒業
明治二十五年七月二十一日　第一高等中学校本科第一部卒業
明治二十九年七月十一日　帝国文科大学国史科卒業
明治三十年四月二十三日　福岡県豊津尋常中学校雇を命ず
明治三十年五月十八日　尋常師範学校　尋常中学校　高等女学校
国語科　英語科　尋常師範学校　尋常中学校
歴史科教員たることを免許す
明治三十年八月二十五日　任福岡県豊津尋常中学校教諭
明治四十一年三月三十一日　福岡県立小倉中学校長に任ず
大正五年一月二十五日　願に依り本職を免ず
大正五年九月二十五日　福岡県立図書館長に任ず
大正十二年三月五日　福岡県立女子専門学校講師を嘱託す
大正十二年四月三十日　公立専門学校教授に兼任す
福岡県立女子専門学校教諭に兼補す
昭和五年五月二十二日　本職を免し公立専門学校教授に専任す
昭和五年五月三十一日　県史料調査事務を嘱託す（死亡迄続く）
昭和二十四年八月二十四日　福岡市中庄町九番地に於て没す（八十一才）

序

友石孝之

今回「京都郡誌」を重版するに当り、著者伊東尾四郎先生について少し紹介しておこうと思う。

伊東尾四郎先生は、近年、福岡県が産んだ郷土史の第一人者で、先賢貝原益軒、伊藤常足に比肩されている。

先生は、もと宗像郡東郷の人で、明治二年、福岡藩儒臣伊東謙吉祐恩の長男に生れ、後、東大に進んで国史科を専攻し、明治三十年八月、歴史の教官としてはじめて豊津中学（今の高校の前身）に来任された。そして、在任約十一年、やがて明治四十一年三月、新設の小倉中学の初代校長に栄転されたが、その間、たまたま郡（郡長佐藤信寿氏）の依嘱をうけて、編纂されたのがこの「京都郡誌」であった。

今でも「錦陵会名簿」を開くと、先生のお名前を見ることが出来る。

もっとも、豊津在職中には仕事をすますことができず、先生は小倉中学に転出したあとも、しばしば足を京都郡に運んで調査を継続されたといわれる。それで実質的には、先生はこの仕事に明治四十一年から大正七年まで正味十一年間という長い歳月を費されたわけで、聞くところ、完成されたのはすでに先生が福岡県立図書館の館長時代、すなわち大正八年だったという。

「京都郡誌」が今とりわけ名著といわれるのも当然であろう。

ことに、この本の中で、先生は御所ケ谷の研究中、たまたま遺跡の石組みにいわゆる神籠石を発見し、自から詳しく実地踏査した上で、その雄大な規模を時の学界に報告するなど、ほとんど不滅の業績をあげていられる。

また、一例をあげると、与原の御所山古墳の研究に際しても、その内部構造の調査に関する、明治二十二年の故坪井正五郎博士の論文を探し出して、その全文を引用掲載するなど、先生の郷土史がいかに克明なものであるかを示している。

その他、等覚寺修験、豊前国分寺、今井祇園祠、村上仏山水哉園あとなど、先生がとくに力をそそいで調査されているところが、今ではことごとく国か県の文化財に指定されているのも、偶然の一致とは考えられない。

ところで、参考のために、嗣子伊東祐俊氏に送っていただいた資料によって、その後における先生の主な著述を紹介しておくと、次の通りである。

筑紫史談（雑誌）	大正—昭和
野村望東尼	
家庭に於ける貝原益軒	大正三年（丸善）
ささのや記（大隈言道）	昭和七年
京都郡誌	大正八年
小倉市誌（上下続）	大正十年—大正十五年
企救郡誌（上下）	昭和六年
門司市誌	昭和八年
八幡市誌	昭和十一年
大牟田市誌	昭和十九年
宗像郡誌（上中下）	昭和六年—昭和十九年
福岡県史資料（第一輯—第十輯、続四輯）	
福岡県史資料叢書（第一輯—第十輯）	

このほか、小倉時代、門司新報に「北豊の儒者及び詩人」「北豊の歌人」という重厚な研究を連載されたこともあった。

伊東尾四郎先生は、晩年は、福岡県から県史料調査を依嘱され多くの業績を残されているが、昭和二十四年八月二十四日、まだ何かの下書きを校正中、赤インキのペンを手に握ったまま永眠されたという。

享年八十一歳であった。

京都郡誌 付報

昭和50年11月
美夜古文化懇話会

父の思い出

伊東祐俊

ふるさとの歴史をきわめあかざりし
人ゆきし秋草木もなかゆ

枡宮照子

これは父が昭和二十四年八月二十四日、八十一歳で没したとき、歌人の叔母から霊前におくられたものである。

父は第一高等中学を経て、明治二十九年東大の国史科を卒業し、その翌年豊津中学の教師を拝命した。これについては次のようないきさつがあった。実は卒業後すぐに維新資料編さん所に入り、研究に没頭していたが、ひどい脚気に悩まされていたようである。見かねた先輩や友人が、その病気は都会を離れると治る。しばらく郷里に帰るが良い　と勧告、父は素直にこれを受けた。郷里は宗像郡であるが、豊津に赴任した。

父のライフワーク郷土史の研究は、豊津時代にはじまったと思われる。それは今般復刊を企画されている京都郡誌が、父の最初の著作であるからである。父は明治四十一年小倉中学校の初代校長に、大正五年には県立図書館の初代館長に任ぜられ、その後、県立女子専門学校の教授などを歴任した。郷土史研究と著作はその間絶えることなく、むしろ晩年に及ぶに従っていよいよその熱意は加わり、山なす資料の整理に多忙であった。最後の二十年間は県の委嘱をうけて、福岡県史資料の編さんに専念した。

昭和十九年の福岡空襲で県立図書館も、私の家も全焼し、父に関する資料の殆んど全部がなくなった。これがため父の著作の全部を正確に記録することはできない。しかし、一部の書籍は古本屋から買い求め、また親戚や知人から多少の資料を入手することができた。これらの正確な資料に私の記憶を織り込み、以下簡単に述べることにする。

父はいろいろな雑誌や新聞によく執筆していた。なかでも筑紫史談という郷土史の定期刊行物（武谷水城氏）には、もっとも数多く原稿を送っていた。また、しばしば日田の広瀬家を訪れ、淡窓に関する資料を整理し、福岡日日新聞紙上に長期連載した。その他、野村望東尼、家庭に於ける貝原益軒、ささのや記（大隈言道）などの単行本を出した。

まとまった著書には京都郡誌、小倉市誌（上、下篇）、企救郡誌（上、下篇）、門司市誌、八幡市誌、大牟田市誌、宗像郡誌（上、中、下篇）等があり集大成した叢書には晩年完成した福岡県史資料（全十輯及び続輯第四）及び福岡県史資料叢書十巻等がある。独力でよくこれまでの仕事をなし遂げたものと今さらながらおどろかされる。福岡県史資料十輯完成のとき寄せられた金田平一郎博士（福岡日日新聞所載）と小野武夫博士（社会経済史学第九巻第三号所載）の書評は、何れもその業績を高く評価しておられる。

私は豊津で生れ、小倉で幼少年時代を過ごしたが、その時代の私の主な思い出は、母が毛筆で原稿浄書をしていた姿や、父母が同じ机で、印刷校正のよみ合せをしていた姿である。また、草鞋をはいて父につれられ、石碑の拓本の加勢をさせられたこと、あるいは小倉の池田活版所にしばしば原稿を運ばせられたことを思い出す。

父は学校のことにも、図書館のことにも極めて熱心であったが、余暇と余生を挙げて郷土史研究と著作にうちこんでいた。杉本勝次知事が弔辞に述べられたように、父は清貧に甘んじ、仕事の中に喜こびを見出すという生活態度で貫いた。脱稿、納本の日など、いかにもうれしそうで、口笛など吹いていた。

美夜古文化懇話会の井本清美氏が、さきほどわざわざ福岡の拙宅にお越しになり、京都郡誌復刊の計画を語られ、さらに畏友友石孝之博士からは懇書をいただいた。そして嗣子の私に何か書くようにとの両氏のおすすめである。父の仕事の内容を十分理解していない私ではあるが、両氏の熱意に動かされ、父の思い出の一端をここに述べさせていただいた。

八十一歳の高令で、福岡県史料叢書最終巻の校了原稿を前に、右手に赤ペンを握ったまま忽然と逝いた父は、今回の京都郡誌復刊の企てを地下できいて喜こんでいることであろう。嗣子の私も感謝の念でいっぱいである。

（福岡市中央区薬院一丁目六ノ七）

父　伊東尾四郎

例言

一本書は京都郡の嘱託によりて編纂せり

一故人の筆に成りしもの、殊に伊藤常足の太宰管内志（豊前部）渡辺重春の豊前志、高田吉近の豊前国志、箕田重麿の豊前遠鏡、毛利正春の孝義旌表録の如きは、成るべく多くこれを引用せり、蓋しこれ等の著者が苦心して記述せし事も、未だ世に知られざるもの多きを以てなり

一本書の最初の口絵にせる大宝戸籍帳は、奈良正倉院御物を撮影せるものにして、特に其の筋の許可を得て掲載せり

一引用原文の長きは一字下げにし、原文を省略するには……或は（〇中略）を用ひ、文字解し難きには其の字数を推して□を入れ、編者の註を加ふるには〇を用ふ、総て引用文の間に編者の按を挾むには、首に〇を施して引用文と区別し易からしむ

一神社仏寺名所旧跡等の伝説は、漫に私見を加へず、伝説のまゝに記述せるもの多し

一各町村に亘れる事項を列記するには、其の順序を左の如くせり

苅田　小波瀬　白川　椿市　諫山　久保　黒田　稗田　延永　行橋　今川　泉　今元　蓑島　仲津　祓郷　豊津　犀川

節丸　城井　伊良原

一本書起稿の際は、材料甚少かりしを以て、些細の材料もこれを捨てずして記載する方針を執りしが、意外に紙数膨大し、紙価印刷費亦非常に暴騰せし為め、紙数に制限を加ふる必要を生じ、原稿の幾分を棄却せり、本書が或部分に精しくして、或部分に疎なるは、固より材料の多少に因るもの多しと雖も、上述の如き事状の存するものあることを告白せざるべからず

一本書の印刷は原稿整理の都合により、第八章神社第九章寺院を先きにせり、これ各寺社には原稿の校正刷を送り、訂正を求むる必要ありしに因る、初め編纂着手の際、各社寺に印刷書を配布して、回答を求めしも、多く要領を得ざりしかば、此の如き方法を執りたるなり、其の他の諸章も亦材料の早く纏りたるものより印刷したるのみならず、全部の印刷終るまでに、意外の長年月を費したるを以て、前後不統一の点あるを免れず、読者幸にこれを諒せよ

一本書の材料蒐集に就きては郡役所、町村役場、各学校神社寺院、其の他小笠原家、細川家等の助力を得たること多し、特に記して其の厚意を謝す

大正八年十二月

京都郡誌編纂委員　伊東尾四郎

伊東尾四郎の生涯と自治体史編纂

報告者：草野真樹

はじめに

＊伊東尾四郎とは

・明治 2 (1869).11.3～昭和 24 (1949).8.24。戦前期，福岡県における地域史研究の第一人者。とくに，福岡県内の自治体史を数多く編纂。

→ 代表的著作：『福岡県史資料』12 輯 と『福岡県史料叢書』10 輯 。ほか『小倉市誌』，『門司市史』，『八幡市史』，『戸畑市史』，『大牟田市史』など 5 市 3 郡の自治体史を編纂。

・数多くの貴重な業績に反し，その生涯と研究活動はほとんど知られていない。

→ （その大きな理由として）昭和 20 年 6 月：福岡大空襲による史料の焼失

＊報告の目的と課題

歴史家・伊東尾四郎の生涯を明らかにしながら，伊東が余暇と余生を挙げて取り組んだ自治体史編纂について，とくに，晩年（第二次世界大戦後）にどのような考えや思いから編纂作業を進め，後世に記録として伝えようとしたのか。

1　明治から昭和戦前期までの歩み

（1）誕生から大学卒業まで

【出　生】

明治 2 年 11 月 3 日　伊東謙吉･マセ夫妻の四男として宗像郡東郷村大字東郷に生まれる。

【伊東家】

福岡藩主黒田家の儒臣として，代々儒学を業とする。尾四郎の 父謙吉 は，文政 8 年 6 月筑前国筑紫郡今泉の 眞鍋家 に生まれ，のち伊東家の養子 となる。その後，修猷館において同館師員井土佐市に師事し漢学を学び，また大隈言道に師事し和歌を学ぶ。謙吉自身も弘化 4 年から明治 4 年まで修猷館の教官を勤め，その後，宗像郡内の小中学校，公立嘉穂学校，県立農学校などで教鞭を執った（荒井編，1929，425～426 頁；伊東編，1944，634～636 頁）。

＊眞鍋安貞（後に伊東祐思，通称謙吉，信天翁と号す）＝生家は大隈言道の旧宅ささのやの隣（現・今泉公園の東隣）に位置（伊東編，1932a，56～62 頁）。

【中学～大学】

明治 19 年 3 月福岡中学校初等中学を卒業。明治 25 年 7 月第一高等中学校本科第一部を卒業。29 年 7 月帝国大学文科大学国史科（現・東大文学部歴史文化学科）を卒業。
→ 4 期生。同期生＝黒板勝美（日本古文書学），内田銀蔵（日本経済史学）など（東京大学文学部編，2005）。

（2）教員・福岡県立図書館館長時代

【故郷へ戻り教員に】

・学生時代からの脚気に悩まされ，早々に故郷へ戻り，明治 30 年 8 月豊津尋常中学校に赴任，歴史を担当（福岡県立豊津高等学校編，1958，196 頁）。
・明治 41 年 3 月　福岡県立小倉中学校の開校とともに初代校長として転任。

≪余話その１≫ 図書館の初代館長は誰？

・大正 4 年 10 月　福岡県臨時県会において県立図書館の設立が可決。大正天皇の御即位大典記念として計画されたもの。
→ 伊東は，校長職を辞し，大正 5 年 1 月 29 日館長に任命され，2 月 4 日に着任（「伊東図書館長着任」『福岡日日新聞』大正 5 年 2 月 5 日）。

＊「図書館工事と館長」『福岡日日新聞』大正 5 年 1 月 30 日。

御即位大典記念の福岡県立図書館は目下工事設計も完成し近々工事に着手する筈なるが，同館長兼事務取扱ひとしては一時佐竹内務部長任命せられ，其の後人選物色中なりしが，愈二十九日附を以て曩に依願退職したる前小倉中学校長文学士伊東尾四郎氏館長兼事務取扱に任命せられ，同時に佐竹内務部長は館長兼事務取扱を免ぜられたり，氏は歴史文学の造詣深く性来研学的の人なれば，同館長としては最も適任なるべしと言へり

＊佐竹内務部長とは＝佐竹義文（よしぶみ）（のちに鳥取県，香川県，愛媛県，熊本県などの知事を歴任した地方官）。
→ 佐竹内務部長は，県属を東京，金沢，京都，大阪，山口などの図書館に派遣。福岡県にとって「範とすべきは金沢，山口の二者なるべし」との感想を述べる。その他，具体的に，「書庫と閲覧室との距離は大に考慮すべき事」，「入館料問題亦一考の値なしとせず」，「消毒室は各館何れもその設備あれども消毒室として使用せるは稀にして，多くは他に転用されつゝあり，左れは本県の如きも云ば最初より除却するが適当なりと感じたり，而して消毒は先づ日光曝書位にて満足すべきか」などと問題点を列挙（「図書館視察談」『福岡日日新聞』大正 5 年 1 月 29 日，並びに『詳説　福岡県議会史　大正篇上巻』1955 年，350～351 頁）。

→ わずか 1～2 ヶ月程度の臨時的な兼職であったが，その間，何もしなかったわけではなく，他県の動向を調査し，図書館の開設をすすめる。

＊伊東も着任後，各地の図書館を視察

既設図書館は何れも狭隘を告げ東京上野帝国図書館の如き広大なる第二閲覧室を仮設して焦眉の急を救ひ居れるが其すら日々満員の状況なり，大阪は目下書庫増設中，東京大橋図書館も書庫の狭隘に苦み，奈良図書館の如きも将来書庫増築の必要あれども（略）新設の者は思ひ切つて広大に計画するの必要あるべく，本県の如きも現に其予想を含めあり（略）巡回文庫は山口県最発達せり，金沢・京都・奈良等もあれども個数少し実験談を聞くに文庫は先方の希望熱心なる処多く巡はすが成績良く余り希望もせざる所に形式的に巡しても効果少しとは左もあるべし（「伊東図書館長視察談」『福岡日日新聞』大正 5 年 3 月 12 日）

【シーボルト著作の購入】

・館の充実を図るべく図書や郷土資料，貴重書などの整備に尽力。

→ 貴重書であったシーボルトの著作『NIPPON』『Fauna Japonica（日本動物誌）』『Flora Japonica（日本植物誌）』『日本書篇』を揃える。

＊購入の経緯

「是等の書が丸善に売物に出た時，私はこれを我図書館に備へたくてたまらず，逸早く取寄せてもらつたけれども，県費で購入することは出来ず，非常に困つたが，東奔西走の末，終に安川敬一郎，麻生太吉二氏の厚意によつてこれを買収し二氏の寄贈書として永く本館に保存せらるゝことになつた」（伊東，1921，21～22 頁）

→ 伊東尾四郎発・麻生太吉宛書簡（大正 6 年 12 月 5 日）

謹啓　寒冷之候，愈御清康奉賀候。扨先日御地へ参リ拝眉ヲ得度存，郡長ヲ介シ御都合御伺申上候処，御多忙ニテ拝眉ノ機ヲ得ズ候へ共，御伺申上候件ニ関シテハ郡長マデ御話被下難有奉存候。即シーボルト著書類寄附金トシテ金壱千円支出ノ件御承諾被下候ニ付，其趣ヲ安川様へ申上，残金参千円ヲ安川様ヨリ支出ノ事御願致御承諾ヲ得申候。就テハ甚恐縮千万ニ候へ共，年末マデニハ丸善へ支払度存候ニ付金壱千円御送金被成下度候。偏ニ御願申上候　敬具」（麻生家文書 T6－856，九州大学附属図書館付設記録資料館所蔵）

⇒ 安川敬一郎 3,000 円，麻生太吉 1,000 円，両名で計 4,000 円を負担し，購入に至る。

【図書館長以外の仕事】

・福岡県立女子専門学校にて国史を担当（福岡女子大学編，1973，378 頁）。

・史蹟名勝天然記念物調査委員（福岡県）。

2　自治体史編纂の開始

・昭和 5 年 5 月　　図書館を（依願）退職。
・昭和 6 年 9 月　　一家は終の住処となる福岡市中庄町 9 番地へ転居。
【自治体史編纂の開始】
『京都郡誌』（大正 8 年），『小倉市誌　上編・下編』（同 10 年）を編纂。さらに福岡県史料調査編纂嘱託として『福岡県史資料』の編纂を担う。

【編纂の基本方針】
「古代よりも近代に重きを置き，治乱興亡に関する資料よりも，民政に関する資料を多く採録」する（伊東編，1932b，例言）。
→ 専門とする文献史学の立場から古文書等の一次史料を重視し，その幅広い調査・収集を原稿に反映させる。
→ 調査の一例　（伊東尾四郎文書・書簡 533）
（一）　神事仏事等特種ノ行事アラバ其大要
（二）　特種ノ風俗習慣アラバ其大要
（三）　特種ノ民謡舞踊アラバ其大要
（四）　盆踊アラバ其行ハルヽ地域
（五）　大庄屋庄屋戸長ヲ勤メシ家或ハ旧家等ニ書付帳面記録等ヲ保存セル家ナキカ
（六）　古老ノ人ニシテ旧藩時代或ハ明治時代初期ノ事ヲ語リ得ル人ナキカ

＊「試に次のやうな質問を発してみる。『明治二十二年は町村の大合併が行はれたが，其の時の事情や，土地戸口の事など書いたものは，ありませんか』。私は幾人かの町村長にお尋ねしたが，『そんな物はない』と答へられる方が多い。（略）一枚の借用証文，一枚の売渡証文でも，当時の生活状態を窺ふべき史料になることを知らねばならぬ。（略）町村史研究の一方法として，老人の来会を乞ひ，座談会を開くことは，最も有意義である」（伊東，1933，47～48 頁）。

【本格的な自治体史編纂と地域史研究】
・昭和 7 年から『福岡県史資料』を刊行，14 年までに計 10 輯を完成。
・『福岡県史資料　続第一輯・伝記編一』（同 16 年）と同『続第四輯・地誌編一』（同 18 年）の 2 輯を追加刊行。
・『企救郡誌』（昭和 6 年），『宗像郡誌　上・中・下編』（同 6～19 年），『門司市史』（同 8 年），『八幡市史』（同 11 年），『戸畑市史』（同 14 年），『小倉市誌　続編』（同 15 年），『大牟田市史』（同 19 年）など 5 市 3 郡の自治体史を次々と編纂。
・『久留米市誌　上・中・下編』（昭和 7～8 年），『鞍手郡誌　全』（同 9 年）の編纂顧問。
→県内各地の自治体史編纂を担い，また各地での講演を引き受けるなど，戦前期福岡に

おける地域史研究の第一人者として指導者的役割を果たす。
・研究雑誌に多くの個別論文や史料紹介なども発表。
⇒ 充実した研究期を過ごす。

3　第二次世界大戦期

【大戦の勃発と戦局の悪化】
・昭和 20 年 6 月 19～20 日　福岡大空襲（福岡県立図書館，伊東家ともに焼失）
⇒ 貴重な図書，史料類の多くが焼失

＊「福岡県立図書館が，焼夷弾により蔵書 12 万冊とともに全焼 した。このとき付近の福岡放送局は職員総出で消し止めたが，図書館には招集等で男子職員が一人もおらず，ただ見守るほかはなかったという」（西日本図書館学会編，2000，141 頁）。
＊「福岡県立図書館ハ多数ノ郷土関係図書ヲ集メシカ，昨年〔昭和 20 年〕ノ罹災ニテ殆ト全部ヲ焼失セリ。疎開セシ書類ハ極メテ少数ニ過キス 」（伊東尾四郎文書・日誌，昭和 21 年 2 月 3 日）

・7 月上旬　娘の秀子とその子供らと共に，英彦山の麓に位置する田川郡添田町落合に疎開。
・大空襲後四女はるえの書簡
　お父様！お父様！ようこそ御無事でゐて下さいました。（略）お年召したお父様が火の中をお逃れになった御様子を想像するさへたまらなくなって泣いてしまひます。（略）お姉様一家と彦山麓に疎開なさいます由，少しでも安らかな御生活が出来ます様にとお祈りいたします。（略）お父様は疎開先でも本と取組むことを考へてゐられて其意気にはほんとうに嬉しくなってしまひますが，でも余り無理をなさらずのん気に遊ぶことも考へて下さいませ。お体を御大事に　かしこ（伊東尾四郎文書・書簡 208）
・昭和 20 年 8 月 15 日　　疎開先で終戦を迎える。

4　戦後の歩み

（1）戦後の生活

【帰 福】
・昭和 20 年 8 月 22 日　　疎開先から戸畑へ移り，9 月中旬帰福。
→ 福岡で仕事を再開するため，子供・孫たちが戻ってくるであろう福岡に住居を構えておきたいため。帰福後すぐに福岡県建築課の設計による 12 坪型組立住宅を申し込む（伊

東尾四郎文書・書簡 206)。
・昭和 20 年 9 月　四女はるえとその子供ら帰国
・12 月初め完成＝新聞社の取材，組立住宅としては福岡市では最初のもの。
※「出来上つた組立住宅　福岡市では一番乗り」(『西日本新聞』昭和 20 年 12 月 9 日)
福岡県建築課で設計した十二坪組立住宅が福岡市本庄町の焼跡に出現した。組立住宅としては同市では最初のもので，基礎工事を終つて材料を持つて来れば大工さん四人で二日かかつたら人が住めるやうになる。間取は六畳一間に四畳半二間，炊事場，便所，押入，玄関は勿論ついてゐる。材料は製材三十石，釘二十四キロ，粘土瓦千八百枚，ボルト十二キロで壁土は用ひず全部板壁だから簡易な割合に板は喰ふ」
・次男と義理の息子を戦争で亡くす。
・昭和 21 年 7 月 10 日　長男祐俊家族が満州より帰国。

≪余話その 2≫ 家族の死と自らの「老い」＋周囲のサポート
・昭和 17 年 4 月　妻ケイ死去
（戦地に赴いていた次男には知らせず。心労をかけないための家族の配慮）
・次男正典の戦死
→ 次々と戦地からの帰還がすすむなか，次男・正典の消息は不明のまま。
→ 昭和 21 年 5 月の伊東の記録　「正典生存ノ事紙上ニ現ハレ大ニ元気ツク」
⇒ 昭和 21 年 8 月 30 日　正典と共にビルマで聯隊本部が同じであった戦友が伊東家を訪れ，次のように語る。
〔正典君は〕情報掛ヲセシガ，十九年聯隊本部ハジャングルニテ孤立，水浸四十日，本部ハ濠ノ内，□□ヨリ汽車，モーハン渡河，ウンドーマテ後退，其ウンドー病院臨時兵站病院，コヽニテ八月爆撃ヲ受ク，実際ノ戦死ハ十九年八月十七日ノ爆撃ナラン（伊東尾四郎文書・日誌)。
・昭和 21 年 10 月 15 日　福岡市から以下のとおり死亡通知が届く。
→「昭和二十年五月二十四日ビルマダトンミョングレー方面ニ於テ戦死」
・五女・操の夫，甥なども戦死
⇒ 精神的にひどく落胆，体調もすぐれず。

≪余話その 3≫ 伊東尾四郎と有光教一
有光教一＝京都帝国大学で考古学を専攻，昭和 6 年に発足した「朝鮮古蹟研究会」助手として慶州へ赴任，昭和 16 年からは朝鮮総督府博物館主任を務める。妻は，伊東尾四郎の四女はるえ。終戦により朝鮮総督府の日本人職員が解任され，在朝日本人のほとんどが日本へ引き上げるなか，独り有光は朝鮮駐屯米軍政庁文教部顧問として残留を命じられる。疎開させていた文化財の回収，博物館の運営方法と古蹟調査事業の経過などを朝

鮮人専門家へ引き継ぐため。有光が帰国できたのは昭和 21 年 6 月のこと。

> 私は，眼前にひろがる廃墟のような福岡市街の惨状に帰国のよろこびも消え，沈痛な気持ちで雨に濡れながら上陸した。そして灯火（ともしび）も疎（まば）らな夕闇のなかを，私は妻の実家〔伊東尾四郎家―引用者注〕にたどりつき，十ヵ月ぶりに妻子と再会したが，ここも空襲で焼け，仮小屋住いであった。（略）前年九月に，九歳を頭に四人の子供を連れて引き揚げてきた妻は並大抵の苦労ではなかった。衣食住のすべてが窮乏を極めた敗戦直後の混乱のなかで，転々と居所を変えるうち，病に倒れ，ひとり住いの老父のもとに身を寄せていた（有光，2007，110 頁）。

→ 終戦後，文化財の回収，博物館の運営方法と古蹟調査事業などの指導を誠実に遂行した研究者として，韓国考古学関係者のなかでは，きわめて高い評価を得ている研究者。大戦後は，京都大学の考古学研究室の教授として，研究と後進の育成に努める。

【質素な生活】
・厳しい食料事情＝甘藷，パン，銀飯，粥，団子汁など。外出の際は弁当持参。
・配給＝米，藷，メリケン粉，乾麺，蒲鉾，バター，醤油，酒，煙草，豆炭などほか。
→「藷質宜シカラス」（伊東尾四郎文書・日誌，昭和 21 年 10 月 29 日），「配給ノメリケンコパン，色悪ク交リ物アリ」（同前，昭和 22 年 4 月 25 日）
→ 親類や知り合い同士での助け合いで乗り越える。また，正月，孫の誕生日や運動会など「ハレの日」には，出来る限りの御馳走を用意。孫の健やかな成長が大きな喜び。

【再出発の宣言】
・昭和 22 年 11 月　　再出発を宣言
　私方罹災全焼せしのみならず陸海軍戦死者も出し災厄続出し為に心身全く衰弱仕候，（略）罹災跡地にささやかなる内科小児科医院を開き申候，私も茲に漸く元気を得，父子相携へて人生再出発の途に就くことに致し申候（伊東尾四郎文書・書簡 540）
→ 焼失した自宅跡地に長男祐俊が「伊東医院」を開業。

（２）福岡県史編纂の再開に向けて

【編纂の再開に向けて】
・体調がよい時は県庁庶務課別室史料編纂所に出勤。県庁では編纂に向けた作業を進めるとともに，関係者らに面会し，県史再開への協力を仰ぐ。
・各地の役場，神社，郷土史家などに質問を認めた書簡を送り疑問点の解明を続ける。
→「元岡村の大庄屋浜地氏の子孫は今も在りますか。若在つて昔の帳面とか書付とか残

つて居るなら拝見に行きたいと思ひます。一応御調下さつて様子を御一報願ひます」（伊東尾四郎文書 1089）

【体調の悪化と編纂態勢の変化】
・体力の衰え，腰痛，腹痛などの理由から出勤を控える日が増える。現地調査なども断念。
・戦後復興期における県史編纂と史料編纂所業務の存在意義
→ 現実問題として，おそらく低下。
→ 県庁内において度々，史料編纂所室の移動を余儀なくされる。
「参事会室ノ予ノ室，又人入リ物品ヲ動カセリ。到底県ノ建物ニテハ仕事出来ズ」（伊東尾四郎文書・日誌，昭和 21 年 12 月 23 日）。

【戦後復興期・混乱する行政】
＊伊東は戦前期に『直方市史（誌）』の編纂を引き受けていた。
一、直方市史編纂ハ香月市長の時決定，予算も計上され草稿も上代より明治時代まてハ大体脱稿致居候
一、万事不安定の時代，会社とか産業とか教育とか凡現代的の部ハ此際起稿を見合すこと
一、明治時代までの分を完成し，これを直方市史資料と題する稿本とし一応打切とする事
（伊東尾四郎文書 1089）
⇒ 草稿の執筆を終えていた伊東は，『直方市史資料』として具体化しようと提案。

＊以下，直方市からの返事。
直方市誌の件は香月市長より清水市長を経て，無事行実市長と代替り致し□□，市勢甚急廻之情況ニ而，此際市誌編纂等は忘れられてはいまいかと存し候，一応市長へ交渉，御返事可申候（伊東尾四郎文書・書簡 434）
⇒ 刊行には至らず。

【史料の移動】
・体力と執務両面の問題に直面
→ 史料編纂所を自宅に置くことを担当者に相談。昭和 22 年 3 月 24 日，許可を得た伊東は編纂所所蔵史料を自宅に運び入れる。以後，県庁ではなく，主に自宅で仕事を進める。

（３）『福岡県史料叢書』の刊行

【刊行の決定】

・昭和 22 年 8 月 18 日　伊東は庶務課の笠原・田中氏より来庁されたしとの連絡を受け，翌日出庁。ここで，伊東は笠原氏から知事が県史編纂の予算を組めと部課長会の時に話されたことを告げられる。

→ 11 月 27 日　秀巧社（福岡市）から出版費の見積もりを取り，笠原氏に対し 3 万円の支出を得れば直に『福岡県史料叢書』第 1 回を発刊したい旨を述べ，庶務課長より同意を得る。

→ 伊東，「愈叢書創刊ノ見込立ツ，慶賀々々」（伊東尾四郎文書・日誌）と喜びの心情を吐露。

【県史資料編纂事業の大要】（作成年不詳〔少なくとも大戦後〕，整理中史料）

前編拾冊ハ学界ニ於テモ好評ヲ博セリ。所載ノ文献ハ今日既ニ焼亡セルモノ少カラズ，今ヨリ考フレハ貴重ノ文献ヲ蒐集シ之ヲ検討編纂公刊シ，印刷亦鮮明ニシテ而モ廉価ナリシコトハ本県ノ為ニ幸ト言ハサルベカラズ

後編拾冊ハ伝記編，地誌編，明治編ニ別チ，伝記編壱冊，地誌編壱冊ヲ公刊セシガ其ノ後時局ノ為印刷困難トナリ殊ニ印刷所東京三秀舎罹災ノ為公刊ヲ中止スルニ至リ，三秀舎ハ罹災後，大日本印刷会社ニ合同ノ姿ニテ瓦斯ノ供給可能トナレハ同社ニテ公刊ヲ引受クルニ至ルベシ 聞〔ママ〕編 ノ原稿ハ大半既ニ成レリ，此原稿ハ幸ニ罹災セズ

＊（本来の）『福岡県史資料』の構成

「伝記編三冊，地誌編五冊，明治編二冊 計拾冊刊行の予定 であつたが，伝記編一冊，地誌編一冊だけ刊行して中止状態になつて居る」（伊東，1949，編輯後記）。

⇒ つまり，『福岡県史資料』は，計 12 輯ではなく，全 20 輯（のはずであった）

・既に，昭和 14 年時点において印刷を担当していた三秀舎（東京）では「工務員中軍需工場等へ転職致す者続出致し人員に不足を相生じ」る状況（伊東尾四郎文書・書簡 194）

→『筑前国続風土記附録』を収録する『福岡県史資料　続第五輯』は入校済であった。

県史資料続第五輯（筑前国続風土記附録）の原稿類は無事の由，当分印刷も不可能と存候ニ付，原稿類一切御返送方前便にて申入候へとも，今に送附これ無く，右は時々閲覧の必要有之候ニ付，何卒至急御返送下され度，（略）私の自宅も罹災，目下左記の処に仮寓仕候，小包は此処へ御送願上候（伊東尾四郎文書・書簡 126，未発状）

【伊東より二案の提示】
・昭和 23 年 1 月　　伊東から県担当者に二案を提示
A＝『福岡県史資料』案は，A5 版・600 頁以内・1 年に 1 回発行・4 回にて完
B＝『福岡県史料叢書』案は，A5 版・100 頁以内・1 年に 3～4 回発刊・10 回にて完
→ 後者 B に決定。
→A 案『福岡県史資料』の普及版とも称すべき，B 案『福岡県史料叢書』の刊行で現実化。「鹿野氏（詳細は不明。編纂作業中に死去）」と吉浦善三郎氏のサポートを受けつつ，伊東は原稿の執筆と修正，校正に全力を注ぎ，わずか一年数ヶ月の間に各輯 80 頁前後からなる『福岡県史料叢書』全 10 輯を完成。

むすびにかえて

＊戦後，伊東は『福岡県史資料』刊行の再開を企図。全 20 輯の完成をめざす。
⇒ 第二次大戦を経験した伊東の思いと努力＝「罹災して多くの史料が滅び（略）今編者が書き残して置かねば，判らなくなることが少くない」（伊東編，1948b，編集後記）という危惧が死去の直前まで筆を走らせる。

＊伊東の編纂スタイルの特徴
・一次史料の復刻・抜粋に重点を置く（地域史研究のための基礎史料を出来る限り網羅）
→「文献には〔福岡大空襲により〕焼亡したものが相当に多」（伊東編，1948a，発刊の辞）かったため，今日においても学術的価値を保つ。
・思想的な偏りや感情を交えず，「史料」で歴史を語るスタイルに徹する。

＊息子から見た父・尾四郎
「父は本職の学校のことにも，図書館のことにも熱心であったが，余暇と余生を挙げて，郷土史研究に打ち込んでいた。清貧に甘んじ，仕事の中に喜びを見出すという，生活態度で一生を貫いた」（伊東，1966，16 頁）。
→ 福岡県全般におよぶ地域史研究に生涯を捧げ，数多くの貴重な業績を遺し，昭和 24 年 8 月 24 日，自宅にて没（数え年で 81 歳）。

＊記録を後世に伝えるために―私たちにできること―
・日本におけるアーカイブズのさらなる整備。
・歴史および記録の保存に個人レベルで良いので，関心を持ち続けること。
⇒ それが記録を後世に伝える「社会の力」の根源

［主たる参考文献・文書］

麻生家文書（九州大学附属図書館付設記録資料館）。
荒井周夫編纂（1929）『福岡県碑誌　筑前之部』大道学館出版部。
有光教一（2007）『朝鮮考古学七十五年』昭和堂。
維新史料編纂会（1921）「第十四回顧問及委員会紀要」同会。
伊東尾四郎（1921）「黒田侯とシーボルド〔ト〕」，『筑紫史談』第 23 号，所収。
伊東尾四郎文書（九州歴史資料館）。
伊東尾四郎編（1932a）『さゝ乃や記』生井薫発行。
伊東尾四郎編（1932b）『福岡県史資料　第一輯』福岡県。
伊東尾四郎（1933）「町村史の研究」，『地方自治』通巻第 59 号，所収。
伊東尾四郎編（1944）『宗像郡誌　上編』深田千太郎発行。
伊東尾四郎編（1948a）『福岡県史料叢書　第壱輯』福岡県。
伊東尾四郎編（1948b）『福岡県史料叢書　第弐輯』福岡県。
伊東尾四郎編（1949）『福岡県史料叢書　第拾輯』福岡県。
伊東尾四郎編（1975）『京都郡誌』美夜古文化懇話会，復刻版。
伊東祐俊（1966）「父の思い出」，『宗像』通巻 172 号，所収。
大濱徹也（2007）『アーカイブズへの眼』刀水書房。
草野真樹（2012）「伊東尾四郎の履歴と研究－その歩みと福岡県史の編纂過程を中心に－」『福岡地方史研究』第 50 号，花乱社，所収。
斉田家文書（九州歴史資料館）
東京大学文学部編（2005）『東京大学文学部　日本史（国史）学科卒業生名簿』東京大学文学部。
西日本図書館学会編（2000）『九州図書館史』千年書房。
『福岡日日新聞』。
福岡県議会事務局編　（1955）『詳説　福岡県議会史　大正篇上巻』福岡県議会。
福岡県立豊津高等学校編（1958）『福岡県立豊津高等学校七十年史』同校。
福岡女子大学編（1973）『福岡女子大学五十年史』同校。
森田千恵子（2009）「なぜ，福岡県立図書館にシーボルトがあるのか」，宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州，そしてニッポン』海鳥社，所収。
吉田 裕（1997）『現代歴史学と戦争責任』青木書店。

平成29年7月25日

第51回　福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行　　福岡県立図書館郷土資料課